

## The Seventh JKUAT Scientific Technological and Industrialisation Conference に参加して 鈴木 信弘

今回、初めてケニアを訪問する機会をいただきました。経済的支援をいただきました日本学術振興会(JSPS)、さらには JSPS アジア・アフリカ学術基盤形成事業(AASPP)「東アフリカ作物ストレス科学研究拠点形成と次世代作物の開発利用」を切り盛りしている坂本亘教授に感謝いたします。今回の一行は、岡山大学環境生命科学研究科の久保教授、岡山大学植物研からは、坂本教授、平山教授、植木助教、Emily Gichuhi (前川研の博士課程の学生)、それに小生を加えた6名での旅行となりました(図1)。

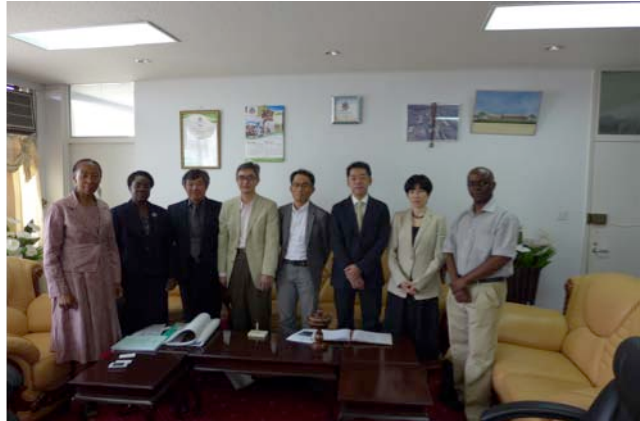


図1

上記会議に参加するために日本を飛び立ったのは2012年11月11日の日付が変わろうとする午後11時30分頃でした。エミレーツ航空を利用した関係でドバイで乗り継ぎ、ケニアのナイロビに到着したのが現地時間で2012年11月12日の午後3時頃でした。そこから、宿泊先のホテル(シルバースプリングホテル)まで直行しました。翌日の13日は(独)国際協力機構(JICA)を表敬訪問し、13日、14日はJKUAT(Jomo Kenyatta University of Agriculture and Technology)の施設見学、意見交換会等を行いました。JKUATはケニア建国の父で初代大統領であるJomo Kenyattaの時代に日本のJICAの支援のもとに1981年Juja(ナイロビの北東36kmに位置する)に設立された大学です。その故あって、見学した園芸学部、食品科学部には日本製品の実験器具が数多く見受けられました(図2)。15,16日は上記のコンファランスに参加しました(詳しくは後述)。その後、文化施設、自然環境保



図2

護地域へのエクスカージョン、JSPS ナイロビ研究連絡センターへの表敬訪問を行い、現地時間 11 月 20 日帰路に着きました。今回の旅行で、また、過去に植物研に在籍した懐かしい面々(Catherine, Florence Masia)と再会できたのも大きな収穫でした。以下に、小生がケニアで体験したことを織り交ぜながらコンファレンスのことを中心に紹介します。

会議は15日、16日と2日間続きました。まず、この会議はその名称からもお分かりのようにこの大学が7年前に科学（と言っても実学的な農学、工学がメイン）の成果発表および議論の場として始めたものであります。カンファレンスのタイトルからも類推されるように分野は幅広く、植物ウイルスのゲノム解析あり、植物の組織培養、マンゴフルーツワインの研究発表から「Policy, Governance, Cultural and Socio-economic aspects of Development」、 「Recent Developments in Health Sciences」あるいは「Energy, Environment and Climatic Change」と題したセッションまで含んでいました。

初日冒頭からケニア文化（いやアフリカ文化と言った方が正確かもしれない）の洗礼を受けました。添付（図3）の初日当初のプログラムでは、9時までに受付を済ませ、その後会議が始まるものと思っていました。しかし、9時過ぎても受付を未だ終えていない人がゾロゾロといて、焦る様子も全くなく会場前の入り口付近にいるのではないですか？そんな光景が、10時過ぎまで続いていたように思います。筆者は基調講演セッションのコチェアを任されていたのですが、なんとオープニングセレモニーは主賓（ケニアの文科大臣が招待されていましたが、実際は科学行政担当者が

Day One: Thursday 15<sup>th</sup> November 2012  
**OPENING CEREMONY**  
**VENUE: AICAD Assembly Hall**  
**MC: Prof. M. Obanda**  
**Rapporteur: Dr. A. Kihurani**

TIME	EVENT	
08.00 - 09.00	Arrival and registration of participants (Secretariat)	
09.00 - 09.20	Opening remarks and invitation of the VC by the DVC-RPE, Prof. E. Kahangi	
09.20 - 09.40	Welcoming speech and invitation of Keynote speaker by the VC, Prof M. Imbuga	
09.40 - 10.10	Keynote address - Research in African perspective by the VC, Vanda University (SA), Prof. Peter Mbatia	
10.10 - 10.15	Invitation of chief guest by the VC, Prof. M. Imbuga	
10.15 - 10.45	Official opening speech - Minister for Higher Education Science and Technology, Hon Prof. M. Kamar	
10.45 - 11.10	TEA BREAK (photographs)	
11.10 - 11.30	Chief Guest visits and officially opens the exhibitions	
<b>PLENARY SESSION 1</b>		
Chairperson: Dr. F. Wanzala		
Co-chair: Prof. N. Suzuki		
Rapporteur: C. Ngamau		
TIME	LEAD PAPERS	PRESENTERS
11.30 - 12.00	Innovative crop stress science for sustainable food production	Prof. W. Sakamoto
12.00 - 12.30	Recent developments in health sciences	Prof. K. Njenga
12.30 - 13.00	<b>DISCUSSION</b>	
13.00 - 14.00	<b>LUNCH BREAK</b>	

図 3

代理で参加するとのことでした) が 10 時過ぎても未だ到着していないとのことで、筆者らのセッションを先に行うとのことが伝えられました。また、そのセ

セッション最後の招待講演者の到着が遅れているため、翌日の招待講演者と入れ替えるとの決断が直前に行われました。そうこうしているうちに、主賓が到着し、予定通り主賓の挨拶を含む挨拶がいくつも重なりました。あげくの果てに、全参加者（100名以上？）が短く自己紹介をさせられる始末でした。

休憩を挟んで、いよいよメインの基調講演のセッションの始まりです。坂本先生による講演は、近い将来予想される90億人という世界人口に対する食料危機に備えるべく何が必要か、1960年代に成し遂げられた緑の革命の代表的産物、短稈性穀物品種は遺伝学的にどのように説明されるか、また、それから何が学べるか、次の革命に植物ストレス科学が如何に貢献できるか、そのための基礎研究の重要性をメッセージ性豊かに話されました。植物ストレス科学が貢献できる研究例として、植物研の山本研究室で行われているアルミニウム耐性を付与する遺伝子ALMT1、さらには、前川研究室で行われている低窒素施肥条件下でも生育旺盛なイネの育種について紹介されました。後者の前川研の研究は、植物研とJKUATでの人的交流の一環として行われています。植物研に在籍するJKUAT出身のエミリーの研究課題、「アフリカのイネ野生種 *Oryza longistaminata* の有用形質をケニア栽培イネ品種への導入」が紹介されました。彼女による研究の大きな進展は、JKUATの職員、学生に大きな刺激になったことは間違いないでしょう。これが良い前例となり、実り多い交流がさらに展開されることが期待されます。さて、このように書いてきて、基調講演のセッションは予定より何時間遅れで終了したと思いますか？驚くことなかれ、最終的に筆者らのセッションが終わったのは、当初の予定より20-30分遅れで済みました。これは、ディスカッションあるいは休憩時間が予め遅れを取り戻すための緩衝帯としてプログラムに組み込まれていたためと思われます。

2日目は岡山大学・植物研、環境生命科学研究科の面々が夫々の仕事を紹介するセッションが開かれました。大気環境ストレス、生物ストレス、果物のポストハーベットの研究の紹介が行われました。それから、来年1月に植物研に来日する Mwashasha



図4 Mwashasha さん



(マシャシャと呼ぶそうです)さんが根圏、土壌から分離される細菌の窒素固定能、リンの可溶化活性のことを報告しました(図4)。非常に残念だったことは、他のパラレルセッションの講演よりも質が高い内容の研究紹介にも拘らず、聴衆は寂しい限りでした。開会式に参加した人数が仮に150名いたとするとせいぜい15名程度だったでしょうか?発表者を除くと、聴衆は10名にも満たないことを意味します。しかし、聴衆の中に熱心に目を輝かせていた学生、若手研究者がいて、質問をしてくれたことには救われた思いでした。コーヒブレイクの際にも、質問しにきた学生がいました。彼らが、きっとケニアの将来を担うことになるのでしょう。

閉会式も例のごとく挨拶が長々と続きました。15分の持ち時間のところ45分にも及びました。挨拶をする主賓の方(閉会式は閉会式の主賓がいて、近くの私立大学の学長あるいは副学長が招待されていました)も始める前は15分で終わらせると述べていましたが、終わってみれば45分という始末です。スライドの枚数からして、15分で切り上げようなどとは初めから思っていないのかと思われました。あるいはそれがケニアでの常識でそうすることがエチケットなのかとも思われます。しつこいようですが、このケニア時間については、もう一つのエピソードを紹介します。ナイロビで宿泊したシルバースプリングホテル(ナイロビでは高級ホテルに属すると思われま)で、試しに7時にモーニングコールを頼みました。しかし、電話がきたのは7時半でした。

ケニアの街、ナイロビ近郊について目についたことを少し紹介します。車はダントツに日本車が多いです。ケニアが親日的なことを強く示唆することと思います。しかし、JSPSケニア事務所、JICAケニア事務所を訪問したとき、あるいは現地のケニア人の口からナイロビからJKUATのあるJujaを経てThikaまでのびているThika Road約50km(主要幹線道路)が中国政府の支援で、つい最近開通したとのことでした。ここでも、中国のプレゼンスが高まっていることを知らされました。加えて目についたのは、どこを車で走っていても多くの歩行者と出くわし



図5 Kita-san

ます。仕事帰りかと思われる時間帯は特にそうでした。乗り合いバスも多く走っていました。それに比べ自転車に乗っている人は少なかったです。筆者にとっては彼らがどのくらい平均歩くのか？あるいはどのくらいの距離を境にバスと歩きを決めているのか興味がありましたので、あったケニア人の方々にこの質問をぶつけてみると、返ってきた答えは、人により、地域（交通事情）により異なっていました。当然と言えば当然のことですが――。しかし、ばらつきはありましたが1 km から 10 km の範囲に収まりました。日本人より長く歩くことは間違いありません。

今回のケニア滞在は約 10 日間でした。筆者にとっては、最近の海外出張としては最も長い旅となりました。そこでは、倉敷の植物研では到底出会うことができない魅力的な方々と話すことができました。例えば、JSPS ナイロビ研究連絡センター所長兼若手社会人類学者の白石さん、ケニアの惚れ込んでケニアのため道路補修のための NGO を立ち上げた Kita さん（ケニア人からもケニア人に見えると評されていました）、JICA ナイロビ事務所の花井さん等等。楽しい旅となりました。